

孤独主義者のレーゾンデートル

青井 一人

人は描き、追い、たった1度の不本意に与えられた灯火を絶やさぬように築き後世に証を残す。

人は描けずもがく、宛もなくゆつくりと回る秒針を見つめ虚空に身を委ねる。

「知らないことは罪である」 「知らないほうが幸福である」

ある者は知に励み、ある者は技を磨く。

ある者は身を捧げ他の成功を補う。

ある者は平凡を望み逆らうこと無くたゆたう。

「それは当然」 「？」

考えもせず、気づかず、見もせず、ただ日々を消化し無意な終末を待つ者、振り返る最期に至るまでの苦  
樂がソレに変わる。

「他力本願な石ころは何を望んだ？」

ただ蹴飛ばされるのを待っていた、私のように。

他者を嫌った、徒党を嫌った、区別を嫌った、輪を嫌った、繋がりを嫌った、自分を嫌った、自分を愛し  
ていた。

残ったものは

孤独だった

## あとがき

見ての通り、僕はストーリーを空想したり創造する能力が乏しいので感覚的に文字と言葉を並べて読む人に「怖い」とか「気持ち悪い」とか「悲しい」とか何でもいいので感じてくれればそれでいいです、

場違いでしたらすみませんでした(´▽`)